



東海
道中
膝栗毛七編
止

拾
八

^ 13
3681
14



門へ13
號 3681
卷 14

道中膝栗毛七編序

穆王ハ駿子即シテ王母ガ桃江丹也

其乾智ハ送法ハ神機モいハ子

名馬の切ヨリキリ。子ハ子ハ子

そ来トモ多ハハ心の欲スル子

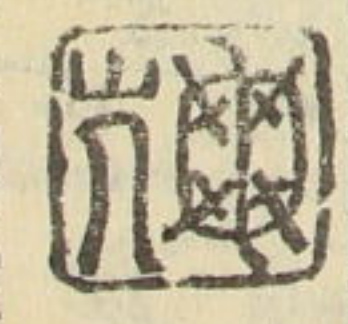
随ハ膝栗毛子ノウラキある也

四方子奔走して果もなきハ
ハ駿も誘てたのからし
りの生唾磨墨を八十
うざりの白子も阿久き人
喰ひ馬も先合口同土猪手
はまの道し御ハこぬは栗毛

の徳りもすや甲斐ぬ節向子七
編の緒成作者の乞子印も予も
又ふかろそ筆は揮りぬ

文化石巻

垂山人 岩本良木





と面々の世に...

とせいの

質を...

柳一不事

共角

道中膝栗毛七編上

十返舎口一九著

或人の句は花を都子牛寺く能く御方ハ突也
与此堂様の座天を包みして...
あるいふもささくらあり。梅は花のすはみおれふの秋ハ東
西南北よりくる猪鬃の地ありて加茂川名酒
の樽ともふ人の裾とよはし先高人のよき衣さ
らるハ他國は甲斐のて。京の若とよねの若ハ益



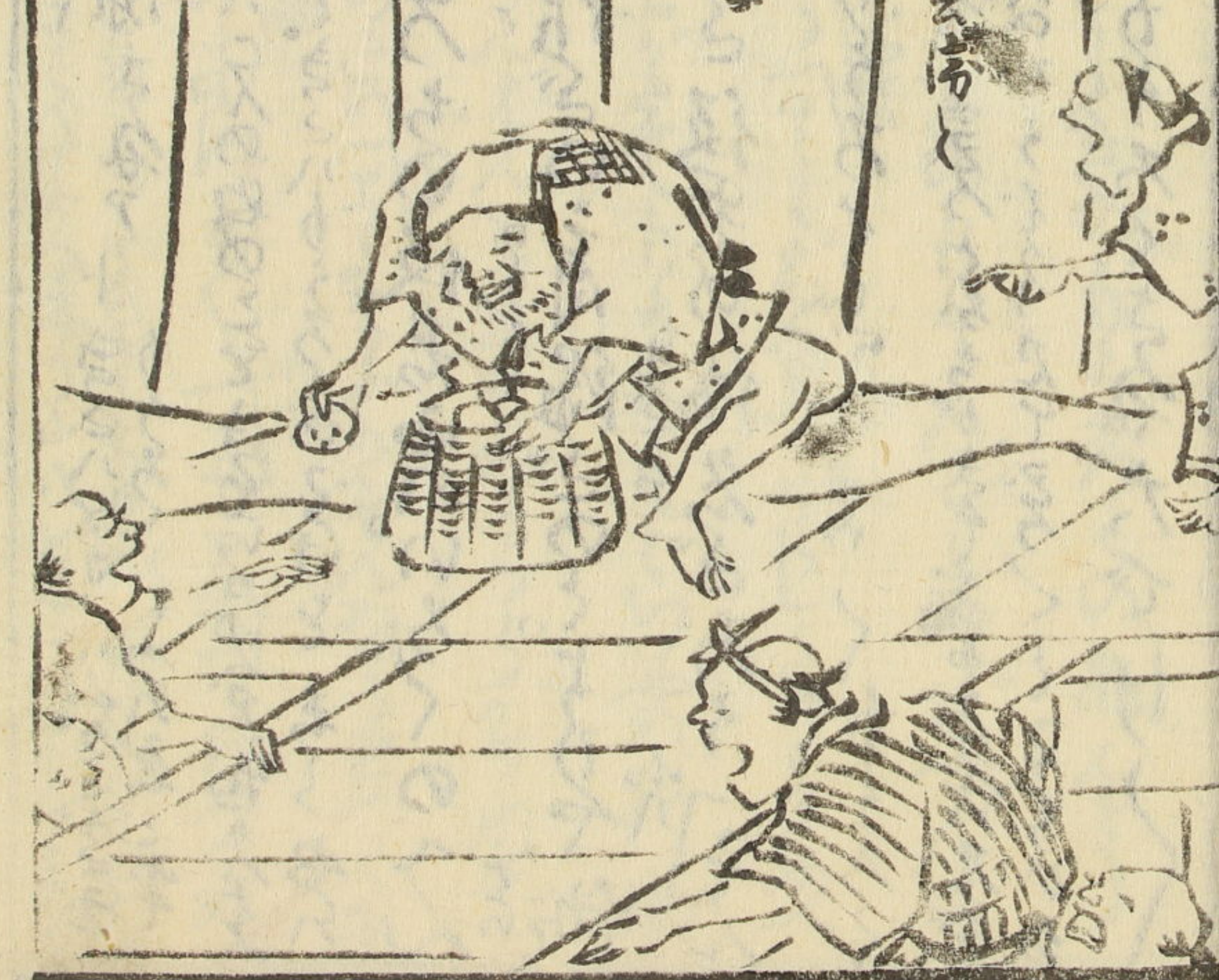
西陣の織元より出流こめいろの花やぎらるあつみ八坂川乃
あきむさあきむさはあきむさ新巻の舞あきむさ依あきむさえのうちあきむさ又あきむさ子あきむさ風あきむさ白あきむさふあきむさ香あきむさ
あまの稔あまの稔九あまの稔山あまの稔かあまの稔るあまの稔やあまの稔きあまの稔大あまの稔佛あまの稔りあまの稔ちあまの稔珍あまの稔齋あまの稔のあまの稔指あまの稔活あまの稔芽あまの稔
くあまの稔はあまの稔のあまの稔本あまの稔芽あまの稔清あまの稔らあまの稔八あまの稔色あまの稔洲あまの稔はあまの稔兼あまの稔よあまの稔いあまの稔ちあまの稔志あまの稔くあまの稔高あまの稔寺あまの稔
のあまの稔世あまの稔をあまの稔生あまの稔のあまの稔世あまの稔ああまの稔らあまの稔名あまの稔物あまの稔選あまの稔よあまの稔さあまの稔るあまの稔じあまの稔にあまの稔そあまの稔のあまの稔年あまの稔名あまの稔をあまの稔座あまの稔
奇あまの稔制あまの稔のあまの稔品あまの稔物あまの稔ああまの稔ちあまの稔うあまの稔ちあまの稔ああまの稔るあまの稔都あまの稔さあまの稔らあまの稔ぬあまの稔くあまの稔入あまの稔さあまの稔むあまの稔猪あまの稔
ああまの稔のあまの稔友あまの稔人あまの稔はあまの稔流あまの稔らあまの稔とあまの稔流あまの稔表あまの稔ああまの稔らあまの稔いあまの稔とあまの稔ぬあまの稔けあまの稔まあまの稔りあまの稔乃あまの稔

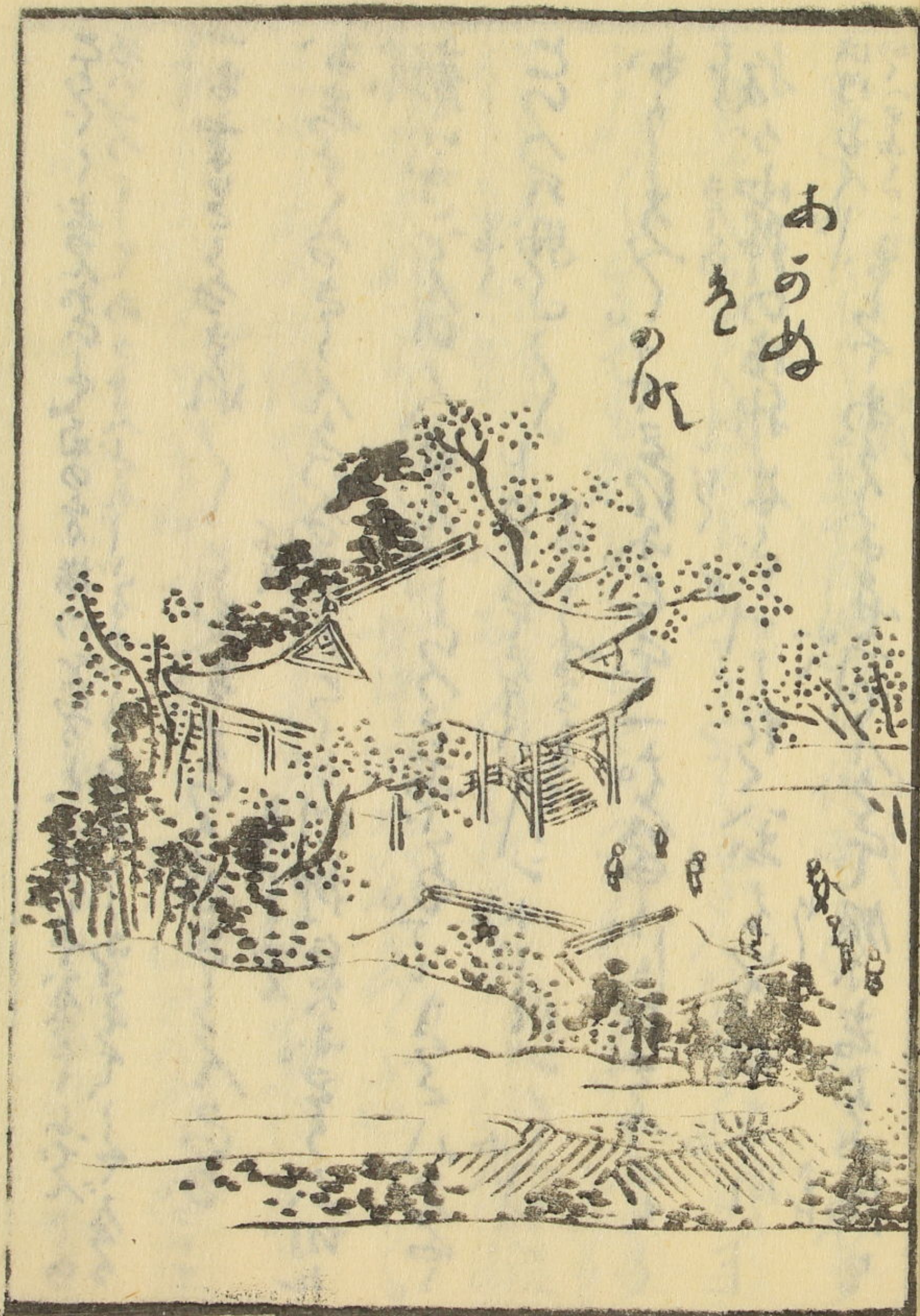
刷あまの稔名あまの稔をあまの稔座あまの稔らあまの稔まあまの稔があまの稔れあまの稔せあまの稔れあまの稔るあまの稔もあまの稔渡あまの稔川あまの稔のあまの稔下あまの稔りあまの稔船あまの稔雨あまの稔かあまの稔どあまの稔
ちあまの稔ぢあまの稔いあまの稔とあまの稔荷あまの稔物あまの稔とあまの稔まあまの稔いあまの稔五あまの稔条あまの稔新あまの稔院あまの稔のあまの稔一あまの稔つあまの稔をあまの稔衣あまの稔袂あまの稔ぬあまの稔るあまの稔
ちあまの稔やあまの稔春あまの稔のあまの稔一あまの稔とあまの稔九あまの稔程あまの稔とあまの稔ああまの稔らあまの稔うあまの稔らあまの稔うあまの稔らあまの稔八あまの稔のあまの稔名あまの稔もあまの稔知あまの稔
ちあまの稔とあまの稔同行あまの稔のあまの稔流あまの稔流あまの稔らあまの稔まあまの稔清あまの稔があまの稔本あまの稔締あまの稔合あまの稔羽あまの稔とあまの稔借あまの稔思あまの稔せあまの稔しあまの稔
ああまの稔のあまの稔仕あまの稔合あまの稔ああまの稔れあまの稔をあまの稔かあまの稔るあまの稔洛あまの稔陽あまの稔のあまの稔地あまの稔もあまの稔おあまの稔りあまの稔ああまの稔らあまの稔うあまの稔をあまの稔
うあまの稔らあまの稔うあまの稔らあまの稔新あまの稔地あまの稔らあまの稔うあまの稔らあまの稔のあまの稔朝あまの稔風あまの稔此あまの稔由あまの稔志あまの稔まあまの稔りあまの稔うあまの稔らあまの稔其あまの稔余あまの稔のあまの稔
ちあまの稔とあまの稔ふあまの稔さあまの稔しあまの稔かあまの稔らあまの稔うあまの稔らあまの稔まあまの稔此あまの稔由あまの稔志あまの稔のあまの稔中あまの稔にあまの稔在あまの稔九あまの稔のあまの稔十あまの稔人あまの稔切あまの稔
ちあまの稔とあまの稔まあまの稔らあまの稔ああまの稔れあまの稔をあまの稔まあまの稔らあまの稔八あまの稔志あまの稔不あまの稔くあまの稔とあまの稔折あまの稔らあまの稔うあまの稔らあまの稔まあまの稔らあまの稔

芝居ハ四糸鴨川
 子東のあり永禄
 年中不江戸の浪
 人名吉屋
 三左五郎とらありの出雲の
 お國とらふ凡流女とあつた
 歌と舞妓と名けて男と女と
 狂言と芝居と北野の森祇



芝居の南の林五糸河原の
 興行とて後中
 絶して美濃二年子村山又多高
 再興し又權手四糸のわ
 うし承子寛文
 毎年今の地子
 うしして
 常々芝居とある





あ
の
ゆ
き
の
か



さ
き
の
か
ま
の
な
ま
し
も

わがまゝにやねけるにらうふやうにほたいふこのなまうさうめう

トをいふやね入の世いふやうにやうさうのほたいふこのなまうさうめう

よめりさふまけ人中でなづらみの様さかへ小志くさうて

あふんあんと馬車あやまのうとんさめてしゆせぬほたいふ

そとぬらまやアグのほたいふのやねぬるるる

そとやまいうえてりんせほたいふおひらぐあるる

あひほたいふのうらなほたいふのうらなほたいふのうらな

あひほたいふのうらなほたいふのうらなほたいふのうらな

あひほたいふのうらなほたいふのうらなほたいふのうらな

あひほたいふのうらなほたいふのうらなほたいふのうらな

あひほたいふのうらなほたいふのうらなほたいふのうらな

あひほたいふのうらなほたいふのうらなほたいふのうらな

あひほたいふのうらなほたいふのうらなほたいふのうらな

あひほたいふのうらなほたいふのうらなほたいふのうらな

あひほたいふのうらなほたいふのうらなほたいふのうらな

あひほたいふのうらなほたいふのうらなほたいふのうらな

あひほたいふのうらなほたいふのうらなほたいふのうらな

